

## 巨人の引き倒し

五輪メダルを剥奪されたアヌシュやファゼカシュに、ハンガリー製のメダルを贈るというニュースがあった。選手を律することができないハンガリーのスポーツ界はだらしがない。ところで、日本のスポーツ界はどうだ。

清原で巨人がまた揉めた。一連の騒動を見ると、巨人ファンも駄目ファンなら、巨人の球団社長もとてもプロの経営者とは思えない。プロ野球を衰退させるのに、ファンも球団も同じだけの責任がある。

清原をトレードで採用した時も、巨人のフロントは落合の処遇をはっきりさせなかった。落合は早くケリを付けてくれなければ、再就職に支障がでると催促したほどだ。清原をとるなら、落合は要らない。こういう単純なことをフロントが言えない。同じことがまた起きている。

それにしても清原は甘えている。巨人に移った時も馬鹿なことを言っていた。10年前のドラフトを謝って欲しいと。巨人が指名しなかったことを言いたいのだ。とてもプロの言葉とは思えない。西武全盛期の四番に座り、チャンピオンシップを制し、何が不満なのか。個人の打撃タイトルをとることなしに破格の待遇を獲得した者が、プロ入りの手続きを謝って欲しいというのは、どうかしている。

同じ甘えがまた出た。起用法をめぐって、球団社長に直訴した。使ってくれるのか、くれないのか。選手起用を決めるのは監督だ。球団社長に泣きついてどうする。堀内監督が怒るのは当然だろう。そんな時間があるのなら、トレーニングしたらどうだ。走れない守れない者をどうやって使うのだ。

生来の才能、とくに高い身体的能力をもつ者は、日頃の鍛錬を怠りがちだ。その典型例が清原と伊良部。伊良部などは、「俺はマラソン選手じゃないから走らない」とうそぶいていた。鈍った下半身と太鼓腹で、大リーグが務まるは

ずがない。清原だって、松井並の走力と守備力があれば大リーグでも通用しただろうが、打つだけでは駄目。巨人も漸くそれに気が付いた。

ところが巨人ファンはミーハーばかり。清原を虐めるのはけしからんと、ファン感謝デーで堀内にブーイングを浴びせたそう。他方、球団社長はこの清原人気に、「何とか監督とうまくやって欲しい」という始末。ファンも球団も、アマチュアのレベルだ。「監督の来期の戦力構想には入っていない。契約最終年だから、君が好きのように決めなさい。残るなら来期の構想に入れるようなトレーニングを積んでキャンプに来て欲しい。そうでなければ、君を求める球団に行くのが良い」でいいじゃないか。巨人に入って年俸の四分の一ほどの活躍もしていないのだから、何の遠慮も要らない。

それにしても、日本プロ野球界の七不思議は清原と長嶋の人気。長嶋がいかにプロ野球の発展に貢献した選手であったとしても、昨今の取り扱いはまるで野球の神様。監督の手腕が評価されなかった長嶋を、どうしてこれほど持ち上げなければならぬのか。まるで読売の陰謀に、日本中が乗せられているようだ。そのことに異を唱えるのも憚れるというのはどういうことだ。さすがに清原にたいしては、広岡が正論を言っている。年俸を半分返上して出直してこい、と。当然だろう。5億円近い大金はバブルもいいところだ。それを見逃している巨人ファンは大甘だ。

それにしても、魁皇は気迫が足りない。好きな力士の一人だが、肝心なところで弱気になり、立ち合いの当たりが弱くなる。こうなると、相手の圧力に押されるから、すぐに引こうとする。負けた一番は皆同じパターン。朝青龍の激しさを見習って欲しい。気迫で相手を圧倒しなければ、綱は張れない。怪我を差し引いても、この軟弱な気性と当たりの弱さが、綱取りを遠くしている。

(T.M.)